寫す、七時宿に歸る、尚明日は川上等寫さ んと思ひしに雨ポチーへ。 をそーと飲み、例の寫生函を左手に右手に 三脚を持つ、北の渡の川口南川の渡市街を 二階より南崎を寫す、女中の持來る茶

七時半錨を捲たマウカに着したのは正午で シを寫す、風景は油繪の様で有つた、午前 マウカ行きの汽船が來ましたとの女中の報 十二日雨降り、汽船の汽笛に目をさまし、 せ、雨中を渡島丸に乗る、船窓よりノダサ

## とんだ繁昌

兵 庫 M 生

てゐるコレでは何共シカタがないから、『何 來たものと見え。チャント商賣道具を弁べ 集まつて來る、團子屋先生も後からツイテ 熱心に輸廓をとつた、ヒヨイと後ろを向い 寫生中澤山の人が集まつたが一向無頓着に めて、位置を變へて畵き初めたが、直ぐ又 る、餘リウルサイので其處はアト廻しと極 屋が荷を置いて見てゐながら商賣をしてゐ て見たら二十人あまりも居る、其上に團子

れとの强請、止むを得ぬから拜承して、豫

て所蔵の馬匹の寫眞數枚を出し、、弦に於て

二十三錢」と、そして僕の寫生はゼロ。 生日く『貴方の後についてゆくと大層繁昌 卒少し彼方へ往つてくれ」と賴んだ處、 君の御經驗を何ひたい。 あい何とかよい工風はないものか知ら、諸 しますので、先の處で四十二錢、此處では 先

時の嬉しさ越後 水彩書を始て實用に供した 靜遠 病 夫

然うである)勿論下手は覺悟でも、畵けぬ 者は仕方がないと断わつた、固辭不聽で、 に交渉されたが、私は生來一たびも馬を畵 いた事がない、 之を募つたに應ずる者が無い、底で私に特 來郡せられた時に、馬の圖が入用との事で 時は三月、本縣の葛畑技師が、畜産講習に 用に供した時の嬉しさは又格別であった。 はぬでしたが、巧拙は姑く措いて、之を質 夫れ以上に利益や愉快を要求しやうとは思 私は水彩畵其物を愛し、又之を樂むので、 一筆畵きてよいから二時間内に仕上げて吳 且、眼病で執筆せぬ、(今尚

> 種を擇み、刷毛で急寫した。見る一十大き 計算し、其中で標準體格とすべきハクニー 知つた、)壁にかけて余念なく眺めた、所 な掛圖が出來た、(此時スケッチ速寫の利を **豫備の力の大なるを悟る)て精密に比尺を**

と答へた、この一刹那の私の驚喜は、筆に 問うたに「馬も馬、生粹のハクニー種です」 は書けぬ、宜しく御察しを願ふ。 訂正をもした。 つてドウャラ馬と見えませうかと恐るし ナと葛畑氏の壁がしたから、私は振りか 突然月の明く音がすると共に、ハクニーだ 息した。技師はサスが専門家、其鑑識眼

なしで、ソコハ素人で遁げ道があります。 野心を生じて、常に眼の平癒を祈つて居る。 野心を生じて、常に眼の平癒を祈つて居る。 野心を生じて、常に眼の平癒を祈つて居る。 野かるハメに成られた時には、大膽に御揮 斯かるハメに成られた時には、大膽に御揮 野なされては如何、諸君の御技倆では必成

校内に轉ぜられ候

→ 其後の入會者左の如し

五木田總右衞門

茨城縣新治郡石岡町

養森田平次郎京都市上京夷川通河原町西入指物町高松康之助

東京府下板橋町

小泉鐵太郎

▲賛助會員並木富太郎氏は群馬縣富岡中學助會員にして、西松氏は未定に候動會員にして、西松氏は未定に候る前號武藤、川島、岡本、石田の四氏は賛

項記載の通り無事終了致候□大阪に於ける本會第二回夏期講習會は別

□講話の大要は次號の紙上より登載の筈に

々掲載可致候
──會期中は例によつて珍談奇聞小なからず

に御披露可致候

□澁溫泉に於ても頗る神秘的な面白い材料

切程の大さに御座俠─本號の日繪は、石川氏が曾て滿洲に滯在

□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於てスケツチせられしものに候□本月は久々にて繪葉書競技會の催有之候(五版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於□石版は、

の中へ入るいこと嚴禁に御座候

候 尤も有益に此夏を過し候間御喜び下され度 に厚く御禮申上候、幹部一同最も愉快に、 □暑中見舞狀を寄せられし各地の讀者諸君

## 評

◎雲表
小島烏水著

京橋區木挽町 左久良書房

四六半截形クロース表装 八十錢山織といへば烏水氏を聯想させる程、山嶽 山嶽といへば烏水氏を聯想させる程、山嶽 の記」、相模野」「冬の淺間山」「日本アルブスの南半」、中房温泉の記」「燕岳及大天井岳にの の上流」等を含む、行文の妙は今更言ふを要せず、自然の研究に於ても他より一頭地要せず、自然の研究に於ても他より一頭地を抽いてゐる、「日本アルブス連嶺を觀ずのを抽いてゐる、「日本アルブス連嶺を觀ずのを抽いてゐる、「日本アルブス連嶺を觀ずのを抽いてゐる、「日本アルブス連嶺を觀ずのを抽いてゐる、「日本アルブス連嶺を觀ずのとった。」

◎名花百種 第一輯、第二輯各四枚二十錢

づゑ」讀者の一讀をすいむ

つき金五錢御送付ありたく、これは開き封